

草創期（
九〇九―一九二三）

村田学園の萌芽

創立前夜

明治時代の簿記事情

わが国の近代的な簿記の歴史は、明治維新とともに始まっている。近世の日本には、いわゆる多帳簿複式簿記といわれる帳合法があったが、商家が自己の財産を管理運営する手段として継承させてきたものであり、一般化していなかった。このため、明治になって客観的な簿記の導入が焦眉の急となっていた。

明治六年、福沢諭吉がアメリカの簿記書を訳して『帳合之法』という名称で出版した。これがわが国の簿記書の先駆とされている。また、これと前後して、銀行制度の施行とともに、銀行簿記に関する書物として英人アラン・シャンド著の『銀行簿記精法』が大蔵省から刊行された。この両書とも、複式簿記を論じ、わが国の簿記史のはじまりとされている。なお、文部省からアメリカ人マルシュの『馬耳蘇氏記簿法』が明治八年に公開されて、全国の小・中学校の教科書として使用されるにいたった。

以降、明治二十年代にかけて数多くの簿記書が著されたにもかかわらず、実用面では見るべきものがほとんどなかった。

この時代は、殖産興業政策により工業の発達が始まり、洋式

複式簿記の普及にはなお時間を要し、大丸とそごうが洋式複式簿記を採用したのも、明治四十一年になってからである。それは、丁稚制度を廃止し、店員制度に切り換えるなど組織上の改革と並行した洋式複式簿記の採用だった。また、京都商人が洋式複式簿記を採用したのは昭和二年の金融恐慌のあとといわれ、猶予令があげた後、貸出に警戒を払う銀行側の要請があったからだ。 (藤田貞一郎他著『日本商業史』による)

今日では、アラビア数字(算用数字)を書けない人はいないが、明治の初期には、読めない人さえ多かった。毛筆で、大福帳のたて書きをペンで横書きにするためには、想像もつかないほどの先輩の努力があった。前記の『銀行簿記精法』という和綴五巻からなる木版刷りの本にも、アラビア数字はなく、壱貳参などの漢数字が使われている。これは実際にも行われていたらしいのである。

立ち遅れた商業教育

明治時代の課題は、西洋諸国に追いつくための近代国家を形成することにあった。この近代国家形成にとって重要なのは富国であり、そのために産業の発達を図る一要素として、産業教育が盛んに唱えられ、実践に移されていた。

明治四年に設置された文部省は、翌五年には、欧米の教育制度、特に学校体系とその行政について研究し、「学制」を布いた。



『銀行簿記精法』

しかし、この学制は、小学・中学・大学の三つに分けた教育制度をとったもので、「農業学校・商業学校・工業学校」は中学の一種とみなされているが、詳細な規定は何も設けられていなかった。まして、職業教育の中心を担っていた各種学校についてはまったく触れていなかった。

当時のわが国の事情は、学制を実施する体制になっていないので、商業学校の実現もなく、学制も空文にすぎなかったのである。こうした状態にあったのも、当時は商業に従事する者には学問は不要という風潮があったからである。封建時代の商業蔑視の風潮は非常に根強く、明治維新以後もこの遺風は改められていなかった。

銀行簿記の基礎を築いたアラン・シャンド

通説によれば、日本近代商業教育の起こりは、明治七年、大蔵省開設の銀行学局であるということができよう。これは、前述の英人アラン・シャンドを雇い入れて、一〇名の官費生に簿記・経済学・銀行論等を教授させたのである。同局はその後、東京商業学校附属学校となり、明治二十六年九月に廃止となるまでに、約六〇〇人の卒業生を輩出し、簿記会計制度の普及に大いに貢献した。

今日の銀行簿記は、このシャンドの銀行簿記によってその基礎が築かれたのである。

しかし、これは特殊部門というべき商業教育であり、一般の商業教育としては、翌八年八月森有礼によって設立された「東京商法講習所」をもってその嚆矢とされている。この「東京商法講習所」がその後種々の変遷を経て東京高等商業学校となり、東京商科大学となり、今日の一橋大学となった。



明治42年11月に創立された、「銀行会社事務員養成所」

銀行会社事務員養成所の創立

生徒数二〇名弱での旗揚げ

明治三十二年、実業学校令が布告され、一応その基準は定められたが、十年後の明治四十二年には、甲種・乙種あわせて八一校に過ぎず、生徒数も、全国で二一、五二四名、一校平均二六五名に過ぎなかった。

明治末期の社会情勢は、財政はひどく窮迫し、産業も十分でなかった。このため、教育に対する世間の理解度は低く、むしろ商人の商業教育は無用論さえ唱える者もいる時代であった。

そうしたある日、強い寒風にさらされながら、レインコートの襟を立てて、町の辻や電柱に、のりバケツを片手にせつせとポスターを貼っている青年があった。

休むことを知らないその青年は、神田界隈を皮切りに、一日、二日、三日と同じ仕事を続けていった。往き交う人々も別に目にも止めなかったが、やはり、二十歳をいくつも出ていない若い青年としては、内心は恥ずかしさで上気していたことであろう。しかし、思いつめたその強い意志と希望に顔も輝いて見える。そのポスターには、非常な達筆で、また、自分で書いたであろうと思われる元気に溢れた文字で「銀行会社事務員養成所生徒募集」と黒々と書かれてあった。

この人こそ、村田学園の創立者であり、今は亡き村田学園の父、村田謙造の若き日の姿であった。

時まさに明治四十二年十一月、村田学園は「銀行会社事務員養成所」として、神田一ツ橋通町に産声をあげたのである。生徒数は二〇人足らず。村田謙造の郷里・山口県の大先覚、吉田松陰の松下村塾にならい、寄宿制をとった。

師弟同行の教育

一ツ橋通町の角地には、女子職業学校(現・公立女子学園)があり、それから北へ、帝国教育会(現・教育会館)と斉藤電気(現・東京都教職員生活福祉協会)が並び、三軒目に書家の小山雪璽の私塾で「春育中学」という、二軒続きの洋風木造二階建て校舎があった。

この校舎は明治四十二年ころから空き家になっていて、南側二階建てを銀行会社事務員養成所が、また、北側二階建てを「中央工学校」が借り入れ、両校は同時に開校を見た。

銀行会社事務員養成所の授業料は四円。美土代町にあった簿記学校の授業料が一円四〇銭だったというから、村田謙造には心中期するところがあつたに違いない。授業を始めてみると、間もなく注目を集めるようになり、生徒は日を追って増加、延べ二〇坪の教室は常に満員の盛況を呈していた。

名声を聞きおよんで、養成所にははるばる地方から入学を希望する者も出てくるようになった。寄宿舎に入りきれない生徒は、自宅に下宿させ、文字どおり寝食をとにした。

こうして、師弟一体となった指導によって、成果は目に見えて上がり、卒業した生徒の就職率は、常に一〇〇%に達していた。

「師につくならい」の先生

当時のようなある卒業生は次のように語っている。

(「学父村田謙造先生を偲ぶ会」における木村留七氏の話から)

除隊にあたり「さあ、何をやろうか」と思っていた折にちょうど「銀行会社事務員養成所」の看板が目にとまり、さっそく訪ねてみました。当時の先生はまだ三十そこその方でしたが、いろいろと話をうかがっているうちに「師につくならこの先生だ」と惚れ込み、さっそく入門しました。

謙造先生は郷里の松下村塾にならい、全寮制で生徒と起居を共にして、学問と共に人間としての生き方を指導されました。規律正しい日常生活は軍隊で経験済みでしたからさほど苦にはなりませんでしたが、簿記と商事諸般の勉強はかなりきつく大変でした。

また、朝起きてから夜寝るまでいつも先生と一緒に、学問以外のことも全部先生仕込みで、卒業の頃は先生の分身のごとく、することなすこと、考えまで先生によく似てしまいました。

珠算界の近代化



29歳を迎えた村田謙造
(大正5年11月3日、
立太子礼祝日を記念し
て愛犬スパニエール種、
メイ号を連れて写す)

珠算奨励会と村田速算学校

数と人生

村田謙造は、常に数の観念に目覚めるよう強調し、常々次のように語っている。

一日の行動は、すべて時間に制限されている。今、人生の出来事をいい表すとすれば、その大小・軽重・長短・高低をできる限り詳細に表すにも、数の力を借りなければならぬ。あらゆる現状を数字で掲げれば、実に一目瞭然だからである。いかなる事業にしても、誠意をもってそれにあたる者は、重要な数字的基礎の下に、あらゆる計画・施設・観察等、いずれも数字の力にまたなければ十分な成果を得ることはできない。社会が進めば進むほど、ますます数字が重要になってくるだろう。

日商検定の生みの親「五一会」

また、村田謙造は、数に基礎をおく計算術の練習の必要を衷心から強調していた。その信念は大正二年四月珠算奨励会となって結実し、二か月後には村田速算学校の併設となって速算および暗算の普



銀行会社事務員養成所第1回同窓会（大正5年5月）前列右より2人目が村田謙造



「自強術(じきょうじゅつ)」で心身の鍛磨にはげむ。最後列中央が村田謙造。自強術とは道家の導引（どういん。道家で行う一種の治療・養生法）と近代の体操とを加味した健康増進法。体肢・関節を伸縮し、皮膚・筋肉を摩擦して、気力と体力を養成する術。また自強とは「自ら勉めて励むこと」の意で、写真後方の『天行健、君子以自強不息』に由来する名称である。

及に大きく貢献したのであった。

このほか大正十一年ころは、高井計之助、村林専之助、川村貫治の諸氏と村田謙造が発起人となり、東京の珠算界の連絡機関として「五一会」を作っている。会の名はソロバンの形態から付けられたもので、後に東京商工会議所の珠算能力検定試験（現在の日本商工会議所主催珠算能力検定試験の前身）を施行するのに大いに力になった。



大正13年10月神田区仲猿楽町17番地に再建された校舎

村田簿記学校と改称

仲猿楽町への移転

大正十年四月、「銀行会社事務員養成所」は神田仲猿楽町に移転し、校名も「村田簿記学校」と改称され開校した。

「公私の会計担当および実業に従事せんとする者のために、簿記・会計・珠算・税務に関する知識技術を授けるとともに、実社会における必要な教育を施す」という目的が、商業の近代化を急ぐ当時の社会に即応したものであり、入学志望者も日増しに増加の一途をたどったのであった。

各種学校の成長発展

大正から昭和初期にかけて、多くの各種学校が設けられた。

資料によると、明治四十二年には実業学校に類する各種学校は四三校だったが、大正十年には五四校に増加。生徒数は三万人あまりに達し、とりわけ女子の社会的進出を反映して各種学校に学ぶ女子が急増していた。

その後も中堅技術者の養成を行う各種学校の人気は上がる一方で、昭和五年には七六校、十年には六二三校と急増している。

数多くの各種学校が生まれては消えていく中で、いつの時代にも創立者の強烈な個性と卓越した指導のもと、職業教育の灯をともしつづけた学校があったことは後に歴史が証明するとおりである。

各種学校教育の変遷

日本の学校教育体系において「各種学校」の名称が初めて登場するのは明治十三年の改正教育令。明治五年の学制を受けて、近代的な学校教育制度を確立しようとしたもので、第二条に「学校ハ小学校、中学校、高等学校、師範学校、専門学校、其他各種ノ学校トス」とある。

当時は近代的な学校制度の確立を急いでいた時期で、完備された学校とは別に、整備の途上にある変則的な小学校、中学校、家塾などを一括して各種学校と呼称していた。

「当初のころは、漢学校、外国語学校などが主流を占めていた。(中略)女子教育の分野では、私立の女学校などの多くは各種学校として出発し、大きな役割を果たした。明治二十年代には日本の産業革命が進み、三十二年に実業学校令が制定されて、中等程度の実業教育の制度が確立されるが、それに先駆けて明治十一年には工手学校が設立され、近代工業に應ずる中堅技術者の養成に着手した。(中略)。商業実務の面でも簿記や珠算を教える学校は、明治十年代から二十年代にかけて設けられ(中略)ていった。」(『准教員研修テキスト』全国専修学校各種学校総連合会)とされている。

文中、工手学校とあるのは現・工学院大学専門学校のこと。このほかにも村田簿記学校および中央工学校(明治四十二年創立)、文化服装学院(大正十二年創立)、ドレスメーカー女学院(大正十五年創立)など、明治・大正期には今日の専門学校を代表する多くの各種学校が設立されている。

各種学校の中には大学や専門学校など正規の学校に昇格していくケースもあったが、こうした流れとは別に、各種学校の伝統を守り通したところも多く、実業学校に類する各種学校は昭和十年には六二三校に達した。

なお、戦後は昭和二十二年の学校教育法で各種学校の規定が設けられ、「第一条に掲げるものの以外のもので、学校教育に類する教育を行うものは、これを各種学校とする」とされた。しかし、各種学校の位置づけはあくまで「学校教育に類する教育を行うもの」でしかなかった。

各種学校の発展を受けて昭和三十一年には各種学校規定が定められる。すなわち、修業年限は一年以上(簡易な課程は三月以上一年未満)、授業時数は六八時間以上(簡易な課程は修業期間に応じて)とされた。